インタビュー

㈱シンコム
代表取締役社長
栗田 達彦 氏

大規模PJに強い設計開発集団

エッジAIとソフト&サービス注力

㈱シンコム（横浜市港北区）は、製造業に特化した総合人材サービスを展開するフジアルテ㈱のグループ企業として、半導体の設計開発やエッジAI関連のソフト／ハードウエアの開発などを手がけている。2030年までに売り上げの倍増という目標を掲げる代表取締役社長の栗田達彦氏に現在の取り組みや今後の展望を聞いた。

――貴社の概要から。

栗田　当社はEDAエンジニアが2004年に設立し、事業ポートフォリオ拡大の一環として21年にフジアルテのグループに加わった。創業時から手がけている半導体の設計開発および設計エンジニアの派遣が売上高の9割を占めており、21年からスタートしたエッジAI関連を第2の柱とするべく拡大を図っている最中だ。

――主力の半導体設計開発について。

栗田　顧客のプロジェクト（PJ）に関わるため、すべてを詳細にお話しできないが、国内の半導体・電子部品メーカーや学術機関などと幅広く取引させていただいている。イメージセンサーやCPU周り、RISC―Vなど幅広い技術分野に対応できるのが当社の強みで、エンジニア一人ひとりのスキルレベルが高いことに加え、規模の大きなPJを受けることができるのが特徴だ。

もう少し具体的にお話しすると、当社のエンジニアをトップに据えて、海外のエンジニアを束ねてPJを推進することができる。当社にはマレーシアやフィリピンなど海外に協力先があり、こうしたパートナー企業とともに3nmや2nmといった先端プロセス案件にも携わっている。

――エッジAI関連の取り組みについて。

栗田　顧客から「AIを使って何をしたいか」を具体的にヒアリングし、3DCGを作成したり、AI学習をさせたりすることに取り組んでいる。主に画像認識系のAI処理を得意としており、これまでの開発実績として、生け簀に移す魚の数をカウントするAIを大手水産加工メーカーと開発した。

こうした開発実績をもとに、多品種を扱うリース業における判別・カウントを画像認識で判断させたり、工場設備のAI化およびDX化などにも応用範囲を広げつつある。フジアルテが様々な工場向けに人材サービスを展開している強みを活かし、今後は展示会などでPRする機会をさらに増やして、製造現場のお困りごとに対応できるようにしていく。

――26年の事業テーマについて。

栗田　設計エンジニアの強化・拡大とAI関連の強化にいっそう取り組む。これら2つは密接に関わっており、とにかくエンジニアを増員しないとAI関連の受注をこれ以上広げることができないというのが実態だ。ご存じのとおり、世界的に設計エンジニアの不足が叫ばれているなか、当社も採用拡大に力を入れているが、そもそも市場に人材自体が少ない。加えて、EDAツールの価格も上昇しており、自前で育成するだけでは追い付かない。半導体プロセスの微細化に対応できる人材や、TEGを作製するためアナログのレイアウトができる人材がほしい。神奈川県が推奨する外国人労働者へ向けた職場環境整備の制度を取り入れ、今後も海外人材による体制強化を進めていく。

もちろん、社内体制の改革にも取り組んでいる。26年度から人事制度改革を本格的に行う予定で、採用などをさらに充実させる。同業他社との「横の連携」をもっと強化し、互いにリソースを融通し合えるようなコミュニケーション活動もさらに活発化させる。

――今後の目標は。

栗田　3つ目の柱としてソフト&サービス事業の立ち上げも進めている。フジアルテの人材と当社のスキルの間を埋めるソフトウエア人材を結集し、組み込みソフトのデバッグ検証といったことができないか検討中だ。こうした事業が育ってくれれば、例えばPythonの分かる人材をAI開発に充てるといった人材の流動性をもっと高めることも可能になる。

現在は従業員60人強の体制だが、30年までに130人へ倍増し、同様に売上高も倍増を目指す。その時には半導体の設計開発が売上高の6割、残り4割をAI関連とソフト&サービスが等分で占めるような事業構成にすることを目標として発展させていくつもりだ。

（聞き手・特別編集委員 津村明宏）